

社会分化論とその問題

酒 巻 秀 明

はじめに

現代社会を考えると、社会的分化の問題を避けて通ることはできないであろう。例えば、ジェフリー・アレグザンダーは、現代の生活の現実的構造、切迫した危険、真の展望の特定には、現在ある他の概念に比べ分化という概念がより近いところにあるよう思われるとしている。(Alexander, 1990, 11) ここでアレグザンダーのように楽観的側面を強調するかどうかを別にして、社会的分化には一つの側面があることに注意すべきであろう。クラウス・オッフエが「近代化」の文脈の中で示したように、一方で選択肢の拡大という社会的事象に対し、その結果生じる不確実性により硬直化拡大という状況も生じてい

る。(Offe, 1986, 100-101) 現代社会の「見通しの悪さ」あるいは複雑性の増大という言葉はこのような事情をさしているといつてよい。

一般的に言うところの分化した社会は一時的には危機に陥るとしても、自ら安定を回復していく、そのようなダイナミズムをもつものと考えられてきた。しかし、W・ビュールの言うように「社会システムは常により高度の複雑性へと発展しなければならない、ないしは複雑性が生存の確実性を高めるといふ仮定は非歴史的でありシステム理論的にも不十分である」(Bühl, 1984, 323) と言える。旧ソビエト連邦の崩壊や旧ユーゴスラビアの内戦などは複雑性を高める方向に進んではいるが混乱を作り出している。また、たえこれらの地域に安定が回復される

としても、いわゆる進化論的な継続的發展のモデルではもう説明はできないであろう。従ってある社会に安定を回復させる力があるとすれば、それは自動的に生ずるものではないと考えるべきであろう。こういった意味で社会分化論はいくつかの点で再検討を必要としている。そこで以下では社会分化論の前提の持つ問題点を取り上げ、理論的再構成のためにどのようにすればいいのか考えていきたい。論点を先取りして言えば、ミクロとマクロの緊張関係の中で社会分化をどうとらえていくかが課題となる。

一 分業論の問題点

アイゼンシュタットによると分化とは、「主な社会的機能或いは社会の主な制度的領域が、同じ制度化されたシステムの境界内で、互いに分離され、特殊化された集団及び役割に結びつけられ、相対的に特殊的で自律的な象徴及び組織的枠組みの中へと編成されるようになる仕方」を表す。(Eisenstadt 1964, 376) その際、継続的な分化は一般的に、主な役割が帰属の土台に置かれ、分業が家族や血族単位を基盤とする原始的社会、或いは小集

団の「理念型」からの継続的發展と把握されてきたという。従って、社会的分化の進展は、単純な社会からより複雑な社会への發展として把握される。しかしこのような社会的分化の想定は必ずしも十分な条件に基づいていえるとは言えない。先ずその点について考えてみよう。

何故社会が分化するのかという問いへの最も単純な説明は、アダム・スミス以来の分業は効率性を増すというものだろう。D・ルッシェマイアーは、構造的分化と効率性の関係を次のように整理している。一、組織の手段的課題と利害を他の人間的関心事から分離することで、選ばれた目的の合理的追求のためにより専心して事物を調整することができる。二、特殊化された執行上の役割は、手段的役割の更なる特殊化の利益を収めるための重要な方法である。三、課題を狭く、はっきりと区切ることで成果の評価が容易になる。四、単純な課題を複雑な課題から分けることで訓練や補充の節約ができる。五、手段的課題を分割することで可能ないくつかの活動に集中することができる。六、ひとたび分業の原理が達成されると、役割や組織を合理的な組織的構造における構成要素と考えることが可能になる。(Rueschmeyer 1977,

や

しかし以上の利点を挙げた上で、彼は以下の三つの点で不十分さを提示している。一、これらの命題は、様々な効率性の利益にとって、とりわけ有利、或いは不利な特別な条件の特定という目的から体系的に検討されねばならない。二、より完全な分析はより分化された単位を統合する必要から生じる、分化の「代償」についての競合する仮説を考慮に入れる。三、効率性に関する様々な結果が逆に、分化を促進し、或いは禁止する条件にどのように影響するのかわく、「フィードバック」機構の問題。そして、決定的な点は、どのような効率性についての判断も、所与の一まとまりの順位のついた目的とこの目的に達するための別の手段についての所与の評価に依存することである。ある選択構造において効率的なものは他の基準では浪費となる可能性がある。(Rueschmeyer 1977, 5) ウヴェ・シマンクは組織論の研究結果から、分業には調整のコスト、動機解体的、柔軟性の侵害、という三つの副作用があるとしている。(Schimank 1985, 423) すなわち分業が効率性とは限らないし、効率性自体についても不明確さが残る。

N・ルーマンも、分業モデルが生じさせた困難は信頼を失うに充分であったと考えている。ルーマンの挙げる問題点は次のようである。一、明らかに意味のある分業の限界があるので、このモデルはある結果、社会的発展のこれ以上ないものを要請しなければならない。この結果はいわゆるポスト産業社会において既に到達したように見える。二、分化は統合や共通の方向性の一般化により補正できると考えられていた。しかしこのことは、過剰な分化の問題ある副次事象の全体複合体を正当に評価しない。三、この概念が社会的階層の問題やその事実を充分に扱うことが出来ないなら、このことは政治的に、支配階級のイデオロギーという負担を負うことになる。(SA2, 193) 以上の点から明らかなように、分業の進展は必ずしも効率の上昇と同時に進行するわけではなく、分業⇨効率性の議論は社会分化の説明としては不十分ということになる。

またルッシェマイアーは、「分化の理論として提示されているものは、たいてい、長期の歴史的発展における大きな社会的複雑性への傾向についての概念形成か、記述的一般化である」(Rueschmeyer 1977, 1)と批判し

ているが、分化を進化ととらえる考え方についても不明確な点が多い。上記のアイゼンシュタットだけではなくパーソンズについてもこのような批判が当てはまるだろう。

ハンフリーズによると、十九世紀の社会進化論には三つの要素が組み合わされていたという。第一に増大する複雑性への発展、第二に発展段階の直線の連続性を規定する法則の探求、第三に進歩への信頼である。(Hamphreys, 1977, 367) パーソンズが抱える問題は、このような進化論の抱える問題とも言ってよい。というのは、パーソンズは、原始的な社会から複雑な社会への発展を進化ととらえ、現代の社会は「ただ一つの進化した起源」に由来することを強調するからである。(Parsons 1977, 291) この際、種としての人間の進化との類似性が重要となる。

パーソンズの言う「諸社会のシステム」によれば、社会とは相対的に自律的な領域的に組織された単位であり、歴史の過程の中で、諸社会のシステムは分化の過程を経験する。そして十七世紀の西欧に関する限りこのシステムは、少なくとも彼のA G I L図式に相当する、区別可

能な四つの社会の類型を含むところまで分化していた。(Parsons, 1977, 291) パーソンズはこの四つの社会類型をそれぞれ四つの地域に割りふるのだが、何故、またはどのようにしてこのような分化が生じ、それぞれの地域に割りふられるのかは、進化と以外説明されていない。このような発展モデルは生物の成長モデルと言えよう。しかしこのモデルでは中心となるプログラムを変更することは不可能である。すなわち新しい構造が生じることはない。

R・J・ホルトンによれば、パーソンズの理論は社会紛争や不均衡に関心を払わないわけではないが、過度な、或いは不適当な分化の様態の結果としての危機の問題には目を向けていない。(Holton 1987, 511-14) 確かに下位システム間の機能不全により社会システムが崩壊しないという保証はどこにもないと考えるべきだろう。パーソンズはこの点でも分化とは反対方向の過程を予め想定することで問題を避けてしまう。パーソンズはこれを包摂と呼び、ある社会システムにとって周辺、或いは領域の近くではあっても「外部」にあった構造要素がシステムの内へ、そして他の要素と充分な統合へとまたらされる

過程を考えている。(Parsons 1977, 293) この様な過程が予め想定されることによって、パーソンズの場合社会システムの本質的な危機は回避されてしまう。更に、ここでもまたこの過程の生じる十分な根拠は与えられていない。従って、以上のような難点を避けるには別のモデルが必要となる。この意味でルーマンの理論構成は検討に価するだろう。ルーマンは社会分化の原因として別の理由を提出するからである。

二 ルーマンの社会分化論

ルーマンもパーソンズと同様、理論構成上、進化論が基本となるがシステム形成の核には複雑性の問題が置かれている。ルーマンによれば複雑性とは、それぞれの要素が、それぞれ他の要素といつでも結合することが可能で無い時のことで、複雑性は要素の必要上選択的な関係付けを要求する。(SA3, 114) 何故なら関係付けの可能性は要素の数とともに飛躍的に増大するからである。(SA3, 55) ルーマンはそのような複雑性の処理(縮減)の為の選択性の形成をシステム形成の問題と位置づけ、システムと環境の区別を複雑性の落差とする。従って、

ルーマンにとってはシステムと環境は不可分なものと考えられている。⁽¹⁾

ではルーマンはどのように社会分化を説明しているのだろうか。まず第一に分化されたシステムの構築と解決すべき問題の特殊化が同時に進行することが示唆されている。(FR, 45) ルーマンによればこの様な過程が進化なのであって、この考え方によれば、社会の複雑化は解決すべき問題の複雑化と関係している。従ってここで問題となる進化概念は決定論ではなく、「変種」「選択」「安定化」という三つの機構の共同作業を通じてもたらされる構造変化の歴史的連関である。(SA2, 150-51) それでは解決すべき問題の特殊化がシステム分化とどのように関係するのだろうか。アイゼンシュタットは制御化された分化が、固有の領界維持機構や、固有の変化の方向、更なる発展の可能性を作り出すとしているが(Eisenstadt 1964, 381) ルーマンも同じように、部分システムの分化を自律化ととらえている。例えば機能分化により経済システムが分化すると、経済危機は経済システムにのみ帰される問題となり、経済の領域での複雑性の上昇は宗教など他の部分システムとは直接関係しな

いようになる。宗教はその結果生じる問題に関わることはあるが、経済だけでは手に負えないときのみである。(FR, 251) 問題の特殊化は領域を限定すること、すなわちその為の部分システムの形成を通じて問題解決の方法を深化させることを可能にする(また選択の可能性の拡大)。領域の分化により、ある部分システムは他の部分システムから相対的に自由に、自己の安定を保てるのである。

次にこれら部分システム間の関係を示す、社会分化の類型についてみよう。ルーマンによれば、システム分化とは、あるシステム内部での、システムと環境の区別の複製でもある。別の言葉で言うところ、分化はシステムそれ自身を、元のシステムの同一性の特別な形を幾つもの内的システムとその環境へと分割することによって増やしながら再生産する。従って分割されたシステムには、すべての部分システムにとって共通な外部環境と、それぞれの部分システムの環境である内部環境という二種類の環境が区別される。(SD, 231) このことから、部分システムは相互に、「他者の環境内」システムとも言いうことができる。

さて、社会の中でのこの様な部分システムの形成、あるいは社会の複雑性は分化の形成に依存しているとして(SA2, 198)、ルーマンはそのような原理として、分節的分化、階層的分化、機能的分化の三つの類型を提示する。(SA2, 153, 197, SA3, 208, SD, 233) 分節的分化は社会を、似たようなシステム形成の結晶点を土台にした、似たような部分システムに分肢する。システムとしての同質性により、個々の部分システムにとっての社会内環境の違いは少ない。階層化は社会を層へと分肢する。層は部分システムの非同質性を土台にして形成され、その結果同質ではないそれぞれの部分が、序列に従って関係づけられる。またシステムだけでなく、その環境も序列に従って決定される。社会内環境は、それぞれ固有の位置から独立しては把握されない。この様な社会が到達できる複雑性はまだ限られている。機能的分化は社会を非同質的な、第一にそれ自身の特別な機能を指向する部分システムに分肢する。序列とは違い、部分システムの社会内環境は前もって決定されていない。しかし機能的分化した社会においても、機能システム相互の関係において構造的両立性の問題がある。ただ、全体としては全体システム

ムにおける構造的意味は少なく、システムと環境相互のつながりも少ない。従って社会的複雑性は層化された社会においてよりも高度になる。第一の類型は未開社会、第二の類型は文明社会、第三の類型は近代社会に該当する。ルーマンによると、歴史的には中世において階層的から機能的な社会秩序への変化が始まっているという。(FR, 229) この時期に既に宗教、政治、経済のための役割システムや役割関係は同一ではなくなっていた。次に十七世紀後半に科学と教育が分化し、それに対応して家族生活が特殊化していった。フランス革命以来、少なくとも十九世紀にはこの新しい秩序は確立していった。

一般的にいうと、階層的分化から機能的分化への移行により、社会を全体として把握するのが難しくなっている。この結果の一つとして、ルーマンは完全性の概念の変化を挙げている。分業論の難点として述べたように、機能的分化した社会は社会を一つの目的を持った統一体として考えることは難しい。この様な社会では規範によって社会を統合することは不可能となる。例えば宗教は宗教システムの分化により、社会に対する影響力を失い、規範を規範の故に受け入れると主張することは出来なく

なる。従って機能分化の過程で完全は時間化され、可能化されていく。ルーマンは市民社会への移行の際に時間的地平の「指導者交替」が生じたとしている。(SAR, 86) というのは関係づけの視点は、過去ではなく未来へと向けられるようになったからである。それ故機能的分化した社会は帰結の問題が明らかにされないまま活動しなければならぬ。逆に言えば、このような問題の解決不能性が成長の自己触媒として役立つことになる。(FR, 222)

変化がシステムの維持にとって重要な要素となると、社会統合のあり方も変化せざるを得ないであろう。ルーマンによると総合は、すべての部分システムがお互いに他者の社会内的環境である、ということを通じて媒介されるようになる。(FR, 233) 部分システムはその構造選択においてすべてのシステムに妥当する要求、価値、規範に従うことではなく、非恣意的に秩序づけられた、社会として保証された、予め構造化された環境に適合しなければならぬ、ということを通じて社会に帰属する。しかし、ある機能領域での最大化が他の部分システムに解決の出来ない問題をもたらすことは避けなければなら

ないのは当然である。そこで、そのための制限は、環境への継続的な関係の結果として直接生じない限り、それぞれの機能システムの反省構造の中に組み入れられなければならない。(FR, 245)

以上のことからルーマンは機能的に分化した社会を次のように規定する。社会は機能や部分システムの合計ではなく、「全体は部分の合計より少ない」、システムとして、一、固有の環境関係を持ち、二、機能的特殊化を始めて可能にする、それぞれの機能システムのための環境を可能にし、三、他の部分システムの環境の成分というそれらの特性上の関心で部分システムの可能性の十分な抑制を行う。(FR, 245)そして結果として規範的側面よりも認識的側面(経済、科学)が強められるようになる。(FR, 246)

部分システムが分化されていく一方で、更に部分システムのレベルでも下位システムの形成が見られるようになる。ルーマンはこのようなものとして相互行為システムと組織システムの二つを挙げている(SD, 232)またルーマンは相互行為システムと組織システムを社会システムの直接の下位システムとする時もあり、その場合水

準の分化と説明することもある。(FR, 277)この方向への変化は当然社会の複雑性への対応能力の上昇と共に、すなわち機能的分化への移行に現れる。(SA2, 9-20)

ルーマンが水準の違いに言及するのは、全体社会システムと部分システムが同じ原理により形成されのに対し、相互行為と組織はシステムとしてそれぞれ異なった性格を持つとするからである。(SA2, 10-13)相互行為システムは、そこにいる人々が相互に認知し合うということにより生じる。これに対し組織システムは、構成員であることが特定の条件に結び付いている。すなわち加入、脱退が条件に依存している社会システムのことである。

こうした水準の分化により社会はより複雑化することが可能になる。というのは、社会は相互行為システムや組織システムによって仲介される問題には手を出さずに済むようになるからである。ルーマンは複雑な社会の中で組織はますます重要性を増すと考えている。そこで上記の仲介の問題について組織システムを例として検討してみよう。

ルーマンは組織への加入と脱退を決断として把握するが、この決断は更に、構成員の獲得と保持の条件につい

ての決断を通じて条件づけられている。言い換えると構成員の条件とは組織により設定された決断の予備条件の承認でもある。(Fr, 286) このことは実際には次のことを意味する。第一に社会システムの水準では機能に関係づけられたすべてのものの包摂と平等が要請されるが、組織の水準ではこの要請は再び取り下げられる。この時構成員の異なった特性は組織上の分化として承認され、また同時にそのことで、例えば不平等と平等、ヒエラルヒーと共同性といったものが一つのシステムの中で同じ次元に存在しないということと社会的に無害化される。(Fr, 289) 第二に組織システムの中では全体社会的に維持できる以上にはっきりとした分化が可能となり、より高度の別の形の選択性を取り入れることが可能となる。従って、組織特有の問題を解決するために、一般的に到達可能な構成員の性質を、更に組織内的に分割することが出来る。(Fr, 299)

この結果、組織は社会の中に細かな場面の分化を作り出す。それ故ルーマンは組織を決断の関連性の解体、すなわち、互いに最小の干渉しか生じない部分単位への細分化ととらえる。組織の介在により全体システムの構造

的複雑性が、状況的に重要となるのを、すなわち同時に個々の決断状況の構造的複雑性を規定するのを回避することが出来るのである。(Fr, 313) 簡単に言うと、組織内の問題は通常は社会の問題ではなく組織内で解決が図られるということにより、社会はすべての問題を引き受けなくてもよいことになる。

社会と組織の関係を複雑性に即して整理すると、以下のように言える。社会とその部分システムにとって複雑性の上昇は、進化の結果及びシステムの環境関係に関する問題の解決であるが、決断性を指向する組織システムにとって複雑性は解決すべき問題である。社会はその複雑性のために問題化の文脈として組織を生み出すが、それは社会が組織に変化するのではなく、特別な種類のシステムの形成である。(Fr, 309) しかしこのことは、社会が社会の複雑性の解消のためにますます複雑化していくことを意味する⁽²⁾。

以上のことからわかるようにルーマンは以前の社会分化論の難点からかなり解放されている。彼の場合特徴的なのは、問題の文脈を分化することで特殊化が生じるだけでなく、問題が社会全体に広がりないように局地化する

ることができると考えている点である。しかしルーマンは分化を問題の解決ととらえるため、過剰な分化やそこから生じる協調の問題についてはあまり重視しない。この点でルーマンの見解に対して批判が生じて当然だろう。

三 ルーマンの問題点

ルーマンよりもパーソンズに近い立場をとるリヒャルト・ミュンヒも次のように批判する。ルーマンは共通の秩序の形成ではなく、分化を通じて到達される行為の異なる方向性間の両立性の保持を統合の問題とするので、原理上既にシステムの分化はその解決になってしまふ。例えばシステムの「相互浸透性」は高度に複雑な環境内でのシステム分化のひとつの前提として理解される。そのため相互浸透性は個々のシステムの自律性に何の変化を与えない。ミュンヒは、ルーマンの統合論はその核心において功利主義的であり、論理的にも不可能だとしている。何故なら、相互干渉のない自律性の完全な発展が可能であるという論理的に不可能なことを要請するからである。(Münch 1981, 111) シュンヒは、ルーマン

がパーソンズの「包摂」概念をシステム分化の理論の一要素へと改変し、そのことでパーソンズの到達した理論的進歩を見逃しているという。(Münch 1981, 112) もちろんミュンヒの言うようにルーマンが現代社会の構成的指標の十分な説明に達していないとまで言い切れるかは疑問である。⁽³⁾しかし、ミュンヒが部分システム同士の間なり合う領域を問題にしているのは重要に思われる。前述のようにルーマンも部分システム間の相互関係を想定しているが、下位システム間の相互作用によって新しい状況が生じる点は軽視している。⁽⁴⁾

他方、ミュンヒは相互浸透性が進化の中心機構であるとするが、この場合進化は「能力の展開より高い段階への発展の表象」と常に結びついているという。そしてより高い能力の段階の形成は能力の一般化を意味するとする。(Münch 1981, 133-34) しかし、そうするとミュンヒもパーソンズと同様進化をより高次の段階への発展と等置してしまうことで、分化と統合の緊張関係を回避してしまう。ミュンヒは、ルーマンがより分化に力点を置くことで、部分システムの自律性の側面が強調され過ぎていると批判しているが、これに対し統合を前提とする

ミューンヒの答えも不十分であろう。実際、分化の進展に対して反対方向に作用する力が要請されるのは間違いないが、そのことが保証されているわけではない。

四 システムの水準間の関係

アンソニー・ワイルデンはこのような二つの方向性をネガティヴ・フィードバックとポジティヴ・フィードバックと見ている。一般にシステムは一群の規範の選択可能性とネガティヴ・フィードバックによって統御されるが、ある限界点を越えた混乱にさらされると、その安定性が自分に利用できる規範の文脈の中では維持不可能になる。この時点でシステムの動揺は、基本である第一水準のネガティヴ・フィードバックでは制御できない。それに続く急激な逸脱の増幅は、第二水準のネガティヴ・フィードバックによってのみ制御される。(Wilden 1980, 375)。

第二水準のネガティヴ・フィードバックは新システムの出現か、あるいは該当するシステムの崩壊という形をとる(Wilden 1980, 209)。

ここでネガティヴ・フィードバックは差異の縮小を意味し、ポジティヴ・フィードバックは差異の増幅を意味

する。(Wilden 1980, 177) ワイルデンによると、ネガティヴ・フィードバックのみの状態が続けばシステムの選択性が強化されるが、柔軟性も縮小する。その結果システムの適応能力は却って減少する。それに對し、ポジティヴ・フィードバックによりシステムの下位システム間の意志疎通における出力、入力間の違いが増幅される。しかしこの過程がそのまま続けばシステムは破裂に到る。従ってワイルデンによると、ネガティヴとポジティヴの両者のフィードバックがシステムの維持に必要なのである。

ワイルデンの考え方をまとめると、分化はシステムが新しい状態へ変化するきっかけとも考えられるが、崩壊の危険をもたらすこともあるということになる。分化はそのような緊張関係の中でとらえられるべきだろう。ルーマンも複雑化された社会での全体社会的葛藤はより稀になるが、より危険になるとしているが、(Satz 18)前にも見たように、組織システムが緩衝機構として働くことにより現実的には回避されると考えている。しかし全体システムが崩壊しても下位システムが存続する可能性が無いとは言えない。この点も考慮に入れる必要がある。

ルーマンは上位のシステムは下位のシステムに対し二重の意味で重要であると考えている。まず上位のシステムは下位のシステムに特定の構造的要件を与え、その上で自己選択的過程が働くことが出来、可能性が制限される。同時に、上位のシステムは部分システムのより身近な環境を調整する。従って、この構造条件と環境条件の二重の干渉が、システム発展の自由さの前提になっている。(SA2, 19) 確かにルーマンは組織相互の関係のネットはそれ独自の発展を刺激するとか、組織は他の組織の環境を乱すことですべての組織に成長や再組織の前提を与えることは認めるが、(SA3, 361) 上記の前提のもとでは、常に組織システムの水準内の出来事となる。つまり下位システムの上位システムへの作用はいわば中立化されることになる。社会は抽象的に見れば自己運動をしているように見えても行為者なしには活動できない。この点で状況・行為者図式を拡大して、システム・環境関係に置き換えるルーマンの作業は意味があるといえよう。しかしこの部分では上位システム、すなわち環境の優位を暗黙の内に認めてしまう。

これに対し、システム・環境関係を一方通行にならず

にモデル化するには下位システムの上位システムに対する働きかけを見ていく必要がある。この意味で、下位のシステムから上位のシステムを見ようとする、シマンクの試みは注目に価する。シマンクは、ルーマンが暗黙の内に想定してはいるが、展開してはいないシステムの行為可能性という観点からシステム間の関係を把握しようとしている⁽⁶⁾。シマンクによると、行為を特徴づける社会的システムと行為可能な社会的システムとの違いに十分な考慮がなされてこなかったという。もちろんこの場合、行為とは個別の行為ではなく、個々の行為の複雑な結合である。行為は行為を特徴づける社会のシステムの条件性の枠の中で行為可能な社会のシステムの指向性から構成されている。(Schimank 1985, 428)

シマンクは全体社会システムとその直接的な部分システムは原理上、行為可能なシステムではなく、行為可能なシステムは部分システムの部分システムの水準で生じるとして、そのような類型として、一、集団、二、社会運動、三、公式的組織、四、組織間結合の四つを挙げている。(Schimank 1985, 435) その際行為の目的はそれぞれの行為可能な社会的システムの利害関心の状況の中

に、手段はその影響の潜在能力の中に見つけられる。

ここで、ある社会的行為者の明示的利害関心とその社会構造的利害関心状況は、同一のこともあるが、同じでないこともある。これらの二つの要素の分離が該当する行為者の行為に重要な結果をもたらし、そのことで社会的分化にも重要となる。

社会的部分システムにとって重要な行為者の異なった利害関心状況は、部分システムの分化の構造にとって重要な、利害関心の布置を形成する。これは典型的な場合調和的に秩序づけられたものではなく、異なった利害関心状況の競合的布置として提示される。この時どの利害関心が貫徹されるかは、行為可能な社会システムの影響力次第である。影響力とは自分の利害に妥当性を得る能力である。シマンクは影響力として制裁と操作の二種類があるという。影響力も利害関心と同様、分化の構造にとって重要な影響力の布置を作り出す。これらの利害関心の布置と影響力の布置を通じて、行為可能なシステムの相互行為を通じて、分化、あるいは分化の解消が生じるのである (Schimank 1985, 430-31)。⁽¹⁾

このとき重要なのは下位のシステム同士が対立関係に

あってもおかしくないという点を強調しておくことである。利害関心という視点を取り入れることによって、必ずしも問題解決を意味しない分化の生じることを明らかにすることができる。

シマンクは更に社会的部分システムを社会的行為者の社会的状況の關係から理解しようと試みることができる。社会的現実とは具体的な社会的状況として、また抽象的な社会的部分システムとして二重に觀察することができる。もちろんそれぞれの社会的行為者にとって、一般化された意味的方向性と社会状況の不確定性の間の違いはよく分かっている。しかし社会的行為者は具体的な社会状況を単純化的抽象に置き換えていくことで、具体性の持つ際限の無さ、不確定性の過剰負担を克服することができる。シマンクはこの点ではルーマンと一致しているが、更に、単純化的抽象を実践的あるいは抽象的フィクションととらえている。具体的社会的状況に關与する行為者による該当する社会的部分システムのフィクションの予期が、社会的部分システムの抽象的行為理論への接近という意味で、状況のフィクション化へと導くのである。(Schimank 1988, 630-636) もちろん社会的

なフィクションはなにかしらの根拠を持つある程度客観的なフィクションでなければならぬだろう。

ルーマンは環境内システムの多層性ということをシステムの水準の分化で明らかにしたが、水準の違うシステムの両立性の側面を強調することで、システムの安定性を想定している。それに対し、シマンクは、具体的状況とフィクションとしての抽象的状況の二重性から出発するので、具体的状況の変化が抽象的状況の変化へとつながる可能性も示すことができる。⁽⁸⁾ 部分システムを社会的行為者の側から再構成するというシマンクの試みは、個々の行為者の視点の重層性の問題を顕在化させる。すなわち、行為者としての個人と行為者としてのシステムの媒介の際に、利害関心も重層化していくことになる。

おわりに

旧ソビエト連邦の崩壊やユーゴスラビアの解体が示すように、分化は必ずしも社会の安定を保証するわけではない。社会安定のオートマティズムとして社会分化をとらえるには限界がある。従って、これらの社会崩壊を把握するには行為者レベルからの視点をもって取り入れて

いく必要がある。しかしその際、行為者として個人だけでなく、行為可能なシステムを媒介することで分析のレベルを重層化することによって、より動的な社会分化の研究を進めていくことができるだろう。

もちろん上位システムも下位システムもそれぞれ独立した変数としてとらえていく必要があるということは言うまでもない。しかしそれらの相互作用が社会の変化をもたらすという点が今までの社会分化論の中で弱かったのではないか。社会分化論の持つ問題点はマクロ的な視点を強調して、ミクロ的な運動を取り入れきれなかった点にある。ハンス・ヨアスが主張するように、社会分化は意図せぬ行為の帰結とのみ理解してはならないし、意図せぬ行為の帰結であっても反省を通じて行為の次の段階に影響を与えることはできる。(Joas, 1990, 24) それぞれの個人の創造的行為は決して無視してはならないだろう。少なくとも社会が自動的に分化するのではなく、具体的な行為の帰結として分化が生じる。従って、社会分化のオートマティズムを想定するのではなく、さまざまなレベルでの行為者と環境としてのシステムの重層的な相互性をとらえることによって社会分化の持つ問題を

よりよくとらえることができるだろう。⁽⁹⁾

- (1) ルーマンによれば、システムは、システムと環境の差異である(SA2, 194)
- (2) ルーマンはこのことを指して、「組織化された複雑性」とも言っている。(FR, 304)
- (3) 例えばキャンツラーは、相互浸透性についてはルーマンの方がシュンニよりもバーソンスの見解に近いと言っている。(Künzler 1986, 424, 4. n)
- (4) この点からは、はたしてルーマンの言うようにシステムの境界がきれいに二值的に分けられるのかという問題も派生してくるが、別の機会に譲る。
- (5) このような逸脱増幅的な過程の特徴は、複数結果的ということである。複数結果的とは同様の初発条件でも異なった結果へとつながることである。Wilden 1980, 323 参照。
- (6) ルーマンも行為するシステムに言及しているがわけではなく。SA3, 66, 42, n 参照。
- (7) ルッシエマイヤーも、権力布置と権力利害の、分化と分化の解消の過程における重要性を指摘している(Rueschmeyer 1977, 23)。
- (8) この際、抽象的状况が具体的状况を変化させる可能性も含まれる。
- (9) この意味でオフエが「協力の問題」を提示しているのは重要だと思われる。

参考文献

- Alexander, J. C., 1990 : Introduction in : J. C. Alexander and P. Colomy (eds.) *Differentiation Theory and Social Change*.
- Bühl, Walter L., 1986 : *Soziologie und Systemökologie, Soziale Welt* 38 : 363-389.
- Eisenstadt, Shmuel N., 1964 : *Social Change, Differentiation and Evolution*, *American Sociological Review* 29 : 375-386.
- Gouldner, Alvin W., 1959 : *Reciprocity and Autonomy in Functional Theory*, pp. 241-270 in : L. Gross (ed.) *Symposium on Sociological Theory*.
- Hamphreys, S. C., 1977 : *Evolution and History : Approaches to the Study of Structural Differentiation*, pp. 341-371 in : J. Friedman and N. J. Rowlands (eds.) *The Evolution of Social Systems*.
- Holton, R. J., 1987 : *The Idea of Crisis in Modern Society*, *British Journal of Sociology* 38 : 502-520.
- Joss, Hans, 1990 : *Die Demokratisierung der Differenzierungsfrage*, *Soziale Welt* 41 : 8-27.
- Künzler, Jan, 1986 : *Talcott Parsons' Theorie der symbolisch generalisierten Medien in ihrem Verhältnis zu Sprache und Kommunikation*, *Zeitschrift für Soziologie (ZfS)* 15 : 422-437.

- Luhmann, Niklas, 1975: Soziologische Aufklärung, Bd. 2 (SA2). 論文篇『社会分化論』1986
- Luhmann, Niklas, 1980: Differentiation of Society (DS), pp. 229-254 in: Differentiation of Society.
- Luhmann, Niklas, 1981: Soziologische Aufklärung, Bd. 3 (SA3).
- Luhmann, Niklas, 1982: Funktion der Religion (FR). 地方版『社会分化論』1988
- Münch, Richard, 1981: Über Parsons zu Weber: Von der Theorie der Interpenetration, S. 108-156, in: W. M. Sprondel u. C. Seyfarth (hsg.) Max Weber und die Rationalisierung sozialen Handelns.
- Offe, Claus, 1986: Die Utopie der Null-Option. Modernität und Modernisierung als politische Gütekriterien. Soziale Welt Sonderheft 4.
- Parsons, Talcott, 1977: Comparative Studies and Evolutionary Change, PP. 279-320, in: Social Systems and the Evolution of Action Theory.
- Rueschmeyer, Dietrich, 1977: Structural Differentiation, Efficiency, and Power. American Journal of Sociology 83: 1-25.
- Schimank, Uwe, 1985: Der mangelnde Akteurbezug systemtheoretischer Erklärungen gesellschaftlicher Differenzierung-Ein Diskussionsvorschlag, ZfS 14: 421-434.
- Schimank, Uwe, 1988: Gesellschaftliche Teilsysteme als Akteurfunktion, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie 40: 619-639.
- Wilden, Anthony, 1980: System and Structure.
- (一頁)『社会分化論』(一橋大学大学院博士課程)